わがまち（うらん）の御前崎港

～港に愛着を～

御前崎市は三方を海に囲まれていることから、私たちは海とともに生き、歴史を重ねてきた。
その中で重要な役割を担ってきた御前崎港はこのまちに何をもたらしたのだろうか。
歴史やインタビューを通じて考えていく―。

国内外への海上輸送網の拠点となることから昭和50年に国の重要港湾に指定された御前崎港は本年4月1日、関税法による開港指定から50周年を迎えた。漁港としても全国的に有名で、カツオやシラス、キンメダイなど多くの魚種の水揚げが盛んだ。その中でも生カツオの水揚げ量は静岡県一を誇る。

世界へ通じる扉 御前崎港

御前崎港ができる前、漁師は小舟で魚を捕っていた。そんな中、昭和23年から港が建設されて大型船が接岸できるようになると水揚げ量は急増し、港の活気は増した。また、同港は本州のほぼ中央かつ駿河湾の湾口部に位置しており、穏やかな水域を有しているため、付近を航行する船舶の避難場所としても利用されてきた。

さらに、「空の玄関口」である富士山静岡空港や東名・新東名高速道路などにも近いことから、県中西部だけでなく国際物流の拠点としても発展してきた。それだけではない。近年は帆船やクルーズ船など各種船舶も寄港するなど、人々が集うにぎわいの場としても利活用されている。

港の建設当時を知る大澤克博さん（西側区）は「このまちは港ができる前から漁が盛んだっただよ。今の港の辺りはずっと